



殺めたきほどは恋せず秋の風
清光館哀史百年後の夜長
三読の渋江抽斎秋の風
反戦のうねりのやうに鳥渡る
北溟の幣オーロラは俘虜の霊
愛されし記憶がふいに稲を刈る
鰯雲神なるものは全てこゑ
おくるみの秋の赤子はフルーツ的
日溜りのやうな掌小鳥来る
逝く夏や唐棣色なるシーグラス
よきギター木は新月に切り出せよ
月光や母を身ごもるこち吾
走り穂や野良着は父の一張羅
満月や一声上げて鳥過ぎる
呼び交はす南瓜の蔓や露月庵

*

国見敏子
堤保徳
宮地良彦
岩井かりん
百瀬石濤子
五味真穂
岩上諒磨
森千恵子
篠遠早紀
木村安以
芳川莞久子
海野恵子
水谷亮一
冲野外輝夫
山田一政

草紅葉いつか着る日のための服
青栗の満足さうな草地かな
つと置けば風が持てゆく虚拔菜
柿紅葉どの一枚も前衛派
秋高しデモ隊鍋を打ち鳴らし
沖凧ぐや誇らしげなる夜木菟稻架
秋の金魚ひらりと庄野潤三忌
不器用の一縷の妙の踊かな
鷹舞ふや忽ち全戸開け放つ
マネキンの腕ばかりの荷ななかまど
人生の佳境となりぬ通草裂け

*

菅原砂登子
上村敦子
篠遠良子
我妻民雄
栗原利代子
原田宏子
満田光生
堀内ただを
池間キヨ子
高橋節子
小林貴子

手水舎の作法を真似て七五三
信仰は時に炎よ曼珠沙華
懸け紙の白や葡萄のラムプめく
渡り鳥よ戦の真を教へてよ

高瀬かず枝
田中信寿
竹内京子
河崎國代

半世紀へ——岳俳句十二月

(532)

——同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

巻頭寸言 コロナは鎮火傾向になった。ところが、世界各地で戦火が燃え上がる。ウクライナ問題に加え、スラブとイスラエルが爆発した。宗教が絡む争いに勝者はあり得ない。すべて共存を望む以外にない。特に宗教の更に奥にあるのは何であるのか。「慾」であるならば、東洋流にいうと人間の「業」。これは人間である限り、なくすことは不可能である。世界は生存の一番本質的な問題を突きつけられている。今年から来年にかけて俳句でも本腰を入れ、歴史の洗い出しが必要になるう。

最良の知識人宮地良彦先生の遺言——『松江抽斎』を三読せよ

三読の 松江抽斎秋の風 宮地 良彦

森鷗外の伝記の傑作である。わが座右の岩波文庫(昭和十二年十月十五日第二版)は三三三頁。ぼろぼろ。一度読み出したが難しくて続かないで、筑摩書房の『森鷗外全集』第四巻の読みやすい本でやっと読んだ記憶がある。「人の運命にも亦自然の消長がある。須く自重して時の到るを待つべきである」津軽藩の医師抽斎が人を諫めたことばとして知る人

反戦のうねりのやうに鳥渡る 岩井かりん

渡り鳥への新たな見方、反戦のシンボルと見たのが斬新だ。

北溟の幣オーロラは俘虜の霊 百瀬石湧子

北のオーロラをシベリアなどで亡くなった俘虜の霊と見た発見には、体験者の実感が籠り迫力がある。

愛されし記憶がふいに稲を刈る 五味 真穂

稲刈から「愛されし記憶」を思い出した、土からの発想が新鮮である。この偶然は日常の探求心の賜物であろう。

鱗雲神なるものは全てこゑ 岩上 諒磨

はじめに声ありき。ことばの源も声とはなるほどと思う。

今月の秀句

殺めたきほどは恋せず秋の風 国見 敏子

これが常人の恋であろう。夢中になっても後になれば、また探せというもの。それにしても、幾つの恋をしてきたことか。愛しんでいるのである。振り返れば秋風が立つ。さばさばする以外ない人生であった。いかにも作者らしい。特徴がある。

は知っていたことば。くだいていうと、人生には自然の春が来るようにこれはとくいいい時がある。その時を逃さないように普段から自重してタイムリングを逃さないことである。

このような生き方を延々と沢山の人物を描きながら書いた本である。宮地先生は三読したという。頭がさがる。

清光館哀史百年後の夜長堤 保徳

柳田国男の『雪国の春』に入る「清光館哀史」は消えゆく盆歌のように、哀れな小話。柳田が六年前の盆に訪ねた東北九戸の小さな宿屋へ再訪、名だけは「清光館」と立派であったが消えてなくなっている。亭主が乗った漁船が遭難、かみさんは町へ働きに、子二人は身寄りが引き取る。一家没落。柳田の記憶には盆歌の片言「なにやとやれ」「なにやとなされのう」が臆気ながらあるだけ。地の者しかわからない哀しみに触れた地貌の素顔。掲句はこの哀話がさらに百年後にはどうなっているか。日本各地の「清光館哀史」への思いを寄せたスケールが大きな句だ。作者でなければ想像しない延々たる呼吸がある。

演劇人らしい発想が初々しい。鱗雲が拡がる天空の奥戸から神の声が聞こえるようだ。しずかに新境地を拓いている。

おくるみの秋の赤子はフルーツ的 森 千恵子

冴えている。軽さにも感性の明るさがある。作者には自家薬籠の作り方、これくらいは当然との思いがあるうか。

日溜りのやうな掌小鳥来る 篠遠 早紀

可愛らしい作。おいでと餌を掌に小鳥を誘った感じ。柔軟な発想が若い作者のこれからの大いに楽しませてくれよう。岳集の〈芋虫や追いかけらるることばかり〉もい。

逝く夏や唐棣色なるシーグラス 木村 安以

はねず色とは白みを帯びた赤色。夏の終わりの海岸詠。波に採まれたガラス片を手にした。季節への愛惜がお洒落。

よきギター木は新月に切り出せよ 芳川莞久子

なるほどと思う。音は自然の神の賜物。ギターが醸す音響も全て人知を超える。天然の音が生れる僥倖を願って。

月光や母を身ごもるここち吾 海野 恵子

わが母をわが子が身ごもる。一心同胎。この気持は女性だけの心情である。月光はいっそう原始の思いを誘う。

走り穂や野良着は父の一張羅 水谷 亮一

野良着こそ秋の稲田のゴールデンステージの晴着。一張羅。

満月や一声上げて鳥過ぎる 沖野外輝夫

満月に雁の風情。さりげない詠み方に細心の心遣いがある。

呼び交はす南瓜の蔓や露月庵 山田 一政

石井露月庵、自在ないきもの風景。南瓜道人とは子規が呈上した露月の愛称。馬で往診した鄙の仁医の素顔が見える。

雪嶺集・前山集から推薦候補作をあげる。

八束穂に空の深さの加はりぬ 原田 宏子

正論は肯んじ難し青林檎 竹岡みち子

今月の秀句

草紅葉いつか着る日のための服 菅原砂登子

「いつか着る日」とは娘の晴れの祝いの日も思い浮かぶ。が、やはり自分のための日。この世を去る時であろう。その日は不意に来る。それは用意だけ。あとはこの世に残る者の裁量に任さざるを得ない。生きるとは今が最高と思えばその僅かな時間こそ極楽浄土なのである。美しい草紅葉の日に手にした服。束の間のよろこびが最高。

秋の金魚ひらりと庄野潤三忌 満田 光生

日常の明るさを偶然の上に繰り広げられる束の間の生に見出した知的感性が確かだ。庄野潤三忌は九月二十一日。小説「夕べの雲」のシーンにこんな光景があったかな。

不器用の一縷の妙の踊かな 堀内ただを

盆踊とは「不器用」なもの。これぞ地の踊。美しい。

鷹舞ふや忽ち全戸開け放つ 池間キヨ子

宮古島詠。渡り来る鷹を迎える歓迎のさまが明るく素朴だ。

マネキンの腕ばかりの荷ななかまど 高橋 節子

デパートへ下ろす荷はマネキン部品。並木のななかまども公害に耐えて頑張っている。病院ではない。はっとした。

人生の佳境となりぬ通草裂け 小林 貴子

「人生の佳境」がいい。思えばその時が佳境。逃さないで掴む感性と知性、不断の只管な精進が稔ったもの。当人の周りの衆の力こそ頼りである。通草が裂けた偶然は忙しさの光景ばかりではない。ユーモアもある。

青雲集

手水舎の作法を真似て七五三 高瀬かず枝

ジャズ聴くや秋の風鈴鳴りやまず 山田 勝文

柿紅葉の天然美をなんと讚えようか―どれもみな前衛派

柿紅葉どの一枚も前衛派 我妻 民雄

今年とはとりわけ美しい柿紅葉。自然こそシニール。そんな秋も今年かぎり。過ぎ行くものへの愛惜もあろう。

青栗の満足さうな草地かな 上村 敦子

いい草地に落ちた青栗。偶然に川の上に落ち、流されて行く栗もある。世は平等ではない。草地に落ちた細やかな感触が青栗にやっと思まれた幸せなのである。

つと置けば風が持てゆく虚抜菜 篠遠 良子

僅かな虚抜菜。晩秋の風がさっと攫うことも自然。調子がいい。表現の芸(巧み)を覚えて、芸に攫われない素朴さも大事なことは承知であろう。

秋高しデモ隊鍋を打ち鳴らし 栗原利代子

可笑しみに力がある。作者の新しい領域か。愉しみだ。

沖風ぐや誇らしげなる夜木菟稻架 原田 宏子

山陰の地貌季語「夜木菟稻架」の見事な作に出会った。

手をきれいに洗うことにも作法がある。ここから信心が生れよう。冒険心を沈めて堅実さが伺え頼もしい。

信仰は時に炎よ曼珠沙華 田中 信寿

イスラエル・パレスチナ戦役詠。信仰が火種になると火の手は広がるばかり。曼珠沙華もおろおろ。鎮火をいかに。

懸け紙の白や葡萄のラムプめく 竹内 京子

童画。俳句に品がある。優しい心遣いが読み手を包む。

渡り鳥よ戦の真を教へてよ 河崎 國代

天空自在な渡り鳥。人間の争いは人知を超えた欲の争い。そこに信仰が絡むと理性は手も足も出ない。鳥に頼る以外にないであろう。

岳集・青雲集推薦候補作をあげる。

だんだんに山高くなり秋来たり 長瀬 冬嵐

大陸育ちよこれしきの暑さなど 渡辺 真帆

どの湖も九月の雨に濡れてをり 安部 克詠

コスモスや揺るる遊びを思ひつく 石井 立文

天井守産まれ来る子に名が付きぬ 諏訪坂恵子

蓮の実の飛んで都に行つたきり 吉池 史江

黄落に染まりし僧の作務衣かな 市川しず子